

DVの母子関係への影響と支援の必要性について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 春原, 由紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/379

■ 実践報告

DVの母子関係への影響と支援の必要性について

武蔵野大学名誉教授

春原 由紀

1. はじめに

筆者は1997年から子どもへの虐待に悩む母親たちのグループカウンセリングを開始したが、そのプロセスで、子ども虐待の背後に潜むパートナーからの暴力に気づかされたのが、DVの問題にかかわる契機となった。

2001年に施行された児童虐待防止法が2004年に子どものDV目撃も心理的虐待と位置付ける改正がなされた。しかし、DVと虐待の問題は、所管する行政官庁が異なるためか、なかなかその関連性をとらえて把握され、支援されることがなかったといえよう。ようやく最近になって、警察のDVケースへの対応に変化がみられるようになり、DVの通報に警察官が出向き、その場に子どもが存在すると面前DVと認識されて児童相談所に通報するというケースの数が激増するようになった。しかし、子どもの被害の状況に関してのアセスメントと援助の方法及び援助の場はほとんどないのが現状である。さらに、被害を受けた母子の関係性までもとらえての支援が必要であるにもかかわらず、そうした視点がみられない。

武蔵野大学心理臨床センター子ども相談部門では、これまで積極的にDV被害を受け様々な課題を負った母子への支援を重ねてきたが、その特徴は、母子の傷つきを回復させるだけでは足りず、心理教育的な支援を展開してきたことにあるであろう。特に、2008年から2015年まで、特定非営利法人RRP研究会と協力し、DV被害を受けた母子に対して同時並行心理教育グループプログラム（コンカレントプログラム）の実践を進める中で、参加した母親たちから、また子どもたちから具体的にその支援について学んできたことは大きい。

DVの被害は、3つに分けて考えられる。一つは、母親（女性）個人の受ける被害であり、2つ目は、子どもが受ける被害である。そして3つ目には、母子関係に及ぼす被害である。本論では、母子関係の被害に焦点を当て、そうした状況で生活する母親と子どもへの影響と支援について考えることとする。

2. DVの母子関係への被害…DVは母子関係を破壊する

① 愛着関係の形成不全

妊娠中から被害を受けていた、あるいは子どもの誕生をきっかけにDVがひどくなったという訴えは被害母親からよく聞く。これを母子関係からみると、子どもと母親（養育者）との安定した相互関係が乳幼児期の発達に欠くことができない要素であるにもかかわらず、母親は常に夫の暴力への警戒と緊張状態に置かれ、また状況に内在した存在である乳幼児は、暴力的な状況に置かれる中で不安定な関係体験を重ねることとなる。母親は子どもへの関心よりも夫との関係により敏感であったり、

あるいは、暴力被害の結果の鬱状態など養育機能を十分に果たせない状況に陥ることにもなる。こうした状況は、安定した母子の愛着関係の形成に問題を生むこととなる。母親から「子どもをかわいいと思えない」などの発言がみられる一方、母親に無表情で接する子どもの姿などから、こうした愛着関係の形成不全がとらえられる。

② 母親としての役割を妨害する

DV加害者は、母親の人権を無視するような攻撃を加える。「それでも母親か」「何もできない」など、母親を徹底して否定する。そして、母親は、それを受け入れ「自分はダメな母親だ」と自信を失うことが多い。また、養育方針も加害者の言うことに従うことで一貫性を失い、子どもとの約束を一方的に破ることも多い。そうした体験を重ねた子どもの中には、ダメな母親として母親への尊敬を失い、母親の言うことを聞かない、反抗するなどの行動がみられることになる。

3. 加害者から離れた後の困難

① DVから離れた後の母子関係の危機…支配関係の再現

現在のDV支援の多くは、支配から離れることに主眼が置かれている。その方向性は安全な状況で母子が生活できるという意味で重要である。しかし、暴力による支配から離れれば問題は解決するかといえば、決してそうではない。長い間暴力によって支配されていた母子は、意識的にではないが、新たな支配関係を築いてしまうことがある。それは、母親による子ども支配(虐待)であったり、また、子どもによる母親や兄弟姉妹支配である。強いものが弱いものを支配するという長期にわたる関係体験は、自己が強い立場に立ったとき、他者を支配するという関係を形成しやすいといえよう。そして、支配の方法として暴力による問題解決も学習してきているのである。

② 養育機能の不全

母親は、DVという厳しい状況を生き抜くために様々な行動の仕方を獲得してくる。身体的な影響(これは、骨折など身体的暴力の外傷だけでなく、長期にわたる高いストレス下での様々な疾病症状などもある)・PTSD(外傷性ストレス障害)・うつ状態・解離・自己評価の低下・判断力や決断力の弱体化・社会的孤立等々その被害は大きい。母親は自分の被害への対処で精一杯であり、子どもの養育を十分にできないでいることも多い。このことは、支援の手が届かなければ、子どものネグレクトになってしまう。また、こうした状況で、子どもの側が母親のケアをするといった役割逆転も見られる。

③ 被害の子どもへの投影

加害者から離れた母親の中には、子ども、特に男児の立ち居振る舞いに加害者を投影し、否定的に感じることを語ることがよくある。これは、母親の長い被害体験からとらえると、ある意味自然な感情であるとはいえ、子どもとの関係には悪影響をもたらすことは言うまでもない。「お父さんにそっくり」などと自分を否定するかのような母親の言動は、子どもの反発・反抗という形で表現されさらに母子関係の発展を阻害する。

4. 母子関係も含めた包括的DV被害者支援

こうした母子関係の不全は、その後の母子の生活を難しくする。母親の受けた被害、子どもの受けた被害、それぞれの回復を目指す支援が重要であることはいうまでもないが、同時に母子関係の回復・改善を視野に入れた包括的支援の必要性は高いのである。これから共に生活していく母親と子どもの関係が改善されることは、母子の生活の質を変えることとなる。

こうした母子関係への支援の視点を含んだ援助の方法としてコンカレントプログラムは機能することができる。コンカレントとは、同時並行という意味であり、プログラムは、母親グループと子どもグループの2つのグループをテーマを共有しながら同時並行的に展開していくものである。

母親グループの目標の一つは、母親自身の被害からの回復である。母親たちは多くの心理・行動的な困難を抱えている。心理教育プログラムのエクササイズを通して、自己の体験を整理し、自己の受けている被害に気づき、新しい価値観とともに前向きに生活を築いていくことが目指されている。

同時に、母親が子どもの回復・成長をサポートできるようになることが2つ目の大きな目標である。そしてこれこそがこの母親グループプログラムの核心でもある。母親たちは自己の困難に対応することで精一杯な状況でもあり、子どもの困難に気づいていないことも多い。そうした状況を切り開き、子どもに向ける視線を回復し、余裕をもった母親としてのかかわりを豊かにしていくことが目指されている。

この2つの目標をバランスよく運営のなかに入れ込んでいくことをファシリテーターは求められる。たとえば、「パートナーの暴力にあった時、貴女はどう感じましたか」という問いかけでのディスカッションの後、「その時、子どもはどう感じていたでしょう」という問いかけでのディスカッションが展開される。このようなエクササイズを通して母親の視線が自分の被害経験だけでなく、子どもの行動や気持ちに向いていくことは、子どもの理解と受容につながり、子どもへのかかわり方が変わり、それが子どもの回復につながっていくといえる。そして、母親としての自分のかかわりの変化で子どもの行動が変化していくことに気づいたとき、母親としての自信につながっていくともいえるのである。

子どもグループの母子関係の改善に果たす役割は大きい。「お母さんが大げさに騒ぐから、お父さんと暮らせないんだ」「お母さんがちゃんとしてれば、お父さんは怒らないよ」などの発言にみられるように、母親が悪いといった感じ方をしている子どももいる。そして、現在の生活の中で母子のけんかが絶えないこともあれば、母親が自責感を強く持ち、子どもに母親として自信をもって対応できていないこともある。そうしたDVに関する誤った子どもの認知は、心理教育プログラムの中で、「暴力とは」「暴力の責任」「問題解決の方法」「怒りとは」「安全に暮らすために」といったテーマのもと、子ども自身がファシリテーターとともに考え、自分なりの答えを見出していくプロセスで変化していく。父親から「俺はお母さんに追い出される」とのメッセージを受け取った子どもが、母親に対し「お父さんが家を出ていったのは、お母さんのせいだ」と責め、そうした発言を母親は受け止めることができずに、ケンカが絶えなかった母子がいた。コンカレントに参加し始めてしばらくしたころ、子どもは「お父さんのことを悪く言うからグループは嫌だ。」と母親に言ったことが話された。子どもグループでは、暴力について話し合ったが、父親のことは全く触れていない。子どもは、暴力と父親とを分けて考えることができずに先の発言をしたと思われる。しかし、継続して参加した彼は、グループが終結するころ、母親に「お父さんは暴力するから一緒に暮らせないんだね」と発言し、母親は、その発言を受け止めることができるようになっていた。その後、母親は、子どもの「お父さんと〇〇に行ったね」などの発言も受け止め、思

い出として語り合うことができるようになったとの報告を受けた。安定した母子関係が構築されつつあるとっていいのではないだろうか。

5. おわりに

DVの被害は大きく、その回復には長い時間が必要である。その長い時間を、母親と子どもは生活を共にする。その生活の中で生じてくる母子関係の多くの課題は、DV被害と切り離されて〈子どもの問題〉〈母親の問題〉として周囲に理解されることが多い。しかし、コンカレントの活動や、DV被害者とのカウンセリングの経験の中で、DVは母子関係を破壊していくのだということ、そしてその後の母子関係だけでなく、母親・子ども双方の問題に繋がっていると強く思う。そして母子関係の再構築をしていく支援の必要性を強く感じる。そうした関係の再構築には、母子ともに、回復のプロセスのどこかで、DVとは何か、暴力の責任はだれにあるのか、平等な関係の構築とは等々を認識的に、また体験的に整理・理解することが必要である。そのための活動が、細やかに、高い頻度で行われることを強く願うものである。

引用・参考文献

春原由紀：Abuseを課題とする母親たちとのグループカウンセリング。人間関係学研究 8(1); 1-10, 2001

武藤安子, 信田さよ子, 春原由紀, 土屋明美：虐待に対する援助のフォーマット作成に関する研究。平成13年度及び14年度厚生科学研究、子ども家庭総合研究事業報告書、2002、2003

春原由紀, 森田展彰, 古市志麻, 丹羽健太郎, 上原由紀, 高梨朋美, 宮川千春：DVに曝された子どもたちへの援助—コンカレントプログラムの実践—。武蔵野大学心理臨床センター紀要 8; 19-61, 2008

森田展彰, 春原由紀, 古市志麻, 信田さよ子, 妹尾栄一, 大原美知子, 高橋郁絵, 古賀絵子, 宮川千春, 上原由紀, 高梨朋美, 谷部陽子, 丹羽健太郎：ドメスティック・バイオレンスに曝された母子に対する同時並行グループプログラムの試み(その1)—プログラムの概要と子どもに関する有効性。子どもの虐待とネグレクト11(1); 69-80, 2009

春原由紀, 森田展彰, 古市志麻, 信田さよ子, 妹尾栄一, 大原美知子, 高橋郁絵, 古賀絵子, 宮川千春, 上原由紀, 高梨朋美, 谷部陽子, 丹羽健太郎：ドメスティック・バイオレンスに曝された母子に対する同時並行グループプログラムの試み(その2)—子どもグループについて—。子どもの虐待とネグレクト 11(1) ; 81-89, 2009

大原美知子, 妹尾栄一, 信田さよ子, 高橋郁絵, 古賀絵子, 谷部陽子, 春原由紀, 森田展彰, 古市志麻, 宮川千春, 上原由紀, 高梨朋美, 丹羽健太郎：ドメスティック・バイオレンスに曝された母子に対する同時並行グループプログラムの試み(その3)—母親の回復過程について—。子どもの虐待とネグレクト 11(1); 90-97, 2009

春原由紀・武蔵野大学心理臨床センター子ども相談部門「子ども虐待としてのDV—母親と子どもへの心理臨床的援助のために—」星和書店, 2011

菅田公子, 春原由紀：DVに曝された母子に対する同時並行プログラムの研究—母親グループの変化プロセスについて—。武蔵野大学心理臨床センター紀要 12; 13-29, 2012

深田洋史, 氷室綾, 白畠若奈, 城月健太郎, 信田さよ子, 森田展彰, 高橋郁絵, 春原由紀：ドメスティック・バイオレンスに曝された母子に対する同時並行心理教育プログラムの実践—母親グループの有効性の検

討一. 武蔵野大学心理臨床センター紀要 15; 53-65, 2015

中村香織, 植田祐理, 上原由紀, 春原由紀, 小西聖子, 城月健太郎: DV被害を受けた小学校高学年グループのトラウマ症状および社交不安に対するコンカレントプログラムの効果. 武蔵野大学心理臨床センター紀要 15; 67-72, 2015